

【拠点形成概要及び採択理由】

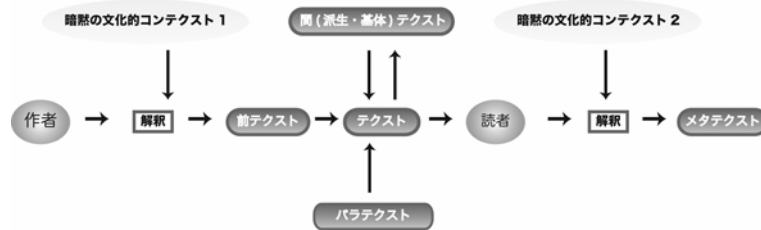
| | | | |
|------------|-------------------|--------|--|
| 機 関 名 | 名古屋大学 | | |
| 拠点のプログラム名称 | テキスト布置の解釈学的研究と教育 | | |
| 中核となる専攻等名 | 文学研究科人文学専攻 | | |
| 事業推進担当者 | (拠点リーダー) 佐藤 彰一 教授 | 外 15 名 | |

【拠点形成の目的】

本プログラムは、21世紀COEプログラムの成果を継承しながら、言語テキスト群の構造解明を中核理論として、若手研究者の効果的育成を目指すことを目的としている。21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」は、歴史、文学、思想、図像、身振りなど人間社会の多様なテキスト形態を統合的、多角的に解明し、大きな成果を収めた。本プログラムは、教育研究拠点形成という趣旨に照らして、これまで得られたテキスト学の学問的成果を基盤に、人文科学の根源である解釈学の新知見を織り交ぜて、文字・言語テキストの解釈的手法をさらに深化し、「解釈」という知的営為を一新する方法論と教授法を確立することを目指している。新たな視線でテキスト現象を見、その背後にあるコンテキストとテキスト布置を理解する手法を自らの学問的ツールとして体得した若手研究者を育成することが本プログラムの目的である。

【拠点形成計画の概要】

(テキストの布置構造)



【テキスト布置とは】

21世紀COEプログラムの5年間から得られた成果の一つは、テキストが特有の布置を自ら構成するという点であった。テキストが成立するプロセスの所産としての前テキスト、他のテキストとの広義の引用関係としての間テキスト性、テキストそれ自体への注釈ないしは解釈としてのメタテキスト、テキストが帰属するジャンルを明示する指標としての題名、書式、構成などのパラテキストなどがその構成要素である。それは上記のように図式化される。こうした一連のテキスト群が取結ぶ諸関係の結節点として当該テキストは存在しており、その布置の総体が広義のテキストなのである。

【基本構想と意義】

21世紀COEプログラムの成果から、言語・文字テキストに特化した理由は、本プログラムが教育研究拠点であるという性格上、より顕著な成果を収めた言語・文字テキストの分野の蓄積を教育に活用すべきであると考えたからである。この実績に解釈学を集大成したガダマーのテキスト論や、ソシュール以後の現代言語学の成果を批判的に継承しつつ練り上げる理論と方法を、人文科学の基礎的教養として構築するならば、先端的かつ新たな学問的地平を切り開く能力と素養を身につけた若手研究者を育成することができる。それぞれ異なる言語で話され、かつ書かれたテキストを解読するための堅固な技術を習得することと並んで、テキストが一つの布置構造を形成して存在していることを理解しかつ前提として、所与の対象に取り組む若手研究者を養成する教育システム構築を目指している。異なる研究科を事業推進担当者に加えた理由は、本プログラムが言語・文字テキスト分野において極めて重要な社会的意味を有する法テキストや経済思想テキストの研究教育も射程に当たっているからである。とくに法のテキスト論的探究は、司法制度改革により一般人が裁判に参加することが決定している現在のわが国の状況に鑑みて、実践的な意味合いも有している。法テキストの意味論的考察は、法学の分野だけでなく、テキスト意味論の問題でもある。

【海外との教育研究協力】

本プログラムが育成しようとしているのは、自らの研究成果をすみやかに国際的通用性の高い言語で発信できる若手研究者である。21世紀COEプログラムでは、海外の多くの大学や研究機関との連携と交流により、豊かな成果を挙げた。この実績は継承する。プロヴァンス大学人文科学センター（フランス）、フランス国立科学研究機構（CNRS）ソシュール研究所、近代テキスト草稿研究所、フランス国立テキスト史研究所などの海外諸機関とは、名古屋あるいは現地で開催された国際シンポジウムを通じて、学問的、人的交流の実を挙げ、相互の対等な学問的協力関係が構築されているが、これに教育面での協力関係を付加する。これら若手研究者には、国際シンポジウムなどの開催を通じて学問的国際体験を蓄積させるとともに、計画中の様々な事業において研究発表を行わせ、恒常的に研究の点検を行い、所要の期間内で学位請求論文を提出させるべく、十分な助言と支援体制を措置する。

| | |
|--|------------------|
| 機 関 名 | 名古屋大学 |
| 拠点のプログラム名称 | テキスト布置の解釈学的研究と教育 |
| <p>〔採択理由〕</p> <p>21世紀COEプログラムの成果を踏まえて、人文学の特定領域に偏らない総合的テキスト学を追究する構想となっているところ及び大学全体の将来構想への位置付けが明確であるところが高く評価できる。</p> <p>しかし他方で、ガダマーの解釈学的枠組みについてはすでに再検討の対象となっているのではないかと、という批判もあり、理論的な検討については一層の努力が求められるし、扱うテキストの種別性についても、社会科学を含めた一層の展開が追求されるべきであろう。</p> <p>拠点としての的確に機能するための場所の確保、専門職員配置についての計画なども、有効なものとして評価できる。現在までに実現している多くの、質の高い国際連携は拠点形成にとっての資産となるものとして評価される。</p> <p>しかしまた、内容的な検討と一層対応した連携先の戦略的な拡大が追求されるべきであろう。アジアの観点を組み込むことも課題であろう。</p> <p>若手の人材育成については、大学院における課程博士論文を提出させるまでの指導体制と研究支援体制が具体的で丁寧によく考えられており、成果が期待できる。</p> <p>他方、海外からの若手研究者の受け入れ体制については、更に工夫を求めたい。</p> | |